

日本はロジタリア革命にむける

指導部のフ。チフル急進主義を

弾劾する //

10. 8以降の基本路線の対立的

I

はじめに

資本主義体制を打倒する真の日は、その口レタリ...

級階級に目をむけたとき、敗戦左翼、インテリ...

日本資本主義の侵略者国主義への敵対新植民...

10月8日、山崎君の死は、このよりの力を...

反スタといふ基本的には正しいけれども、現在の...

革命組織が政治権力と結合すべきは当然のこと...

II

現地斗争万能主義は正しいか？

今回の路線の偏向は、昨年2月26日砂川斗争を...

ますます縮小分化する学生運動、帯日主義的...

展を妨げる一方、スルシェンヨーシの元圧級び...

れであった。真に権力と結合すべきは何か、がこ...

裏付けられているのである。さうにスンドの末期...

た。糾弾されなければならぬのは、彼等が演説...

このことは4・21における方向転換がすでに中核派...

け、日本政府の加担は誰の目にも明らかならなう。日本政府の加担は誰の目にも明らかならなう。

そこで登場するのが基地であった。12年前の砂川斗争が改めて意識に上り、何らかつ抵抗を続けている砂川現地反対同盟との交流は、学生運動に当面の突破口を与えるものとしてあつたのである。日本政府の具体的な加担の一つ一つをつぶすという位置づけ、首都を揺るがせた。現地に於ける学生も亦、サンディイッチ系を以てなく、現地農民に押される由ではじめて、久しく待たれた戦斗的形態をとりとどる得た、という二つの事実が、基地斗争を学生運動の中心課題として不動のものへ引き上げていった。同じことはまた、日韓斗争の過程で生じた反戦青年委員会がその後継けた停迷を打ち破る要因ともなつた。ここに、その後継く現地斗争の物質的保障がでま上るのである。

二 西に佐世保・東に三里塚・壬子二

前書きで述べられたように、現地斗争が二弾・佐藤訪へ下阻止斗争へ10・8には、手さぐりで始ま

つた現地斗争での学生、行動隊の衝突を、一大政治問題として夕々にスル新を大々おさせせるものとして結果した。その時、佐藤内閣の目にはある反動化、ベトナム戦争への加担の急増を呼びおこしていった。

戦術批判をぶき消すだけの共感と支持で学生運動が展開した。その時、佐藤内閣の目にはある反動化、ベトナム戦争への加担の急増を呼びおこしていった。戦術批判をぶき消すだけの共感と支持で学生運動が展開した。その時、佐藤内閣の目にはある反動化、ベトナム戦争への加担の急増を呼びおこしていった。

いえ、学生者個人が現状への不満を訴う感じは

あつた。その時、佐藤内閣の目にはある反動化、ベトナム戦争への加担の急増を呼びおこしていった。

力ナメと行つた。三里塚に於る農民、壬子に於る学生、佐藤訪へ下阻止斗争へ10・8には、手さぐりで始ま

二 大衆から群衆へ二

「群衆といえど、個々には別々の者である」といふことを知り、更には、その別々の者が壬子での怒りを現場に還流させることと、これを、かつてNCが正しく批判した。佐藤内閣のシヨック戦術、外野注入主義と、この二つが、いかに社会、スターリニストに毒を吐いてきたか。

いえ、学生者個人が現状への不満を訴う感じはあつた。その時、佐藤内閣の目にはある反動化、ベトナム戦争への加担の急増を呼びおこしていった。

現地斗争、船を否定するのではない。現地斗争にすべく、日産を追い付けば、当然行方

このように斗争の破壊的のひとり歩きをこそ
否定するのである。と同時に単純なこの構造さえ
見逃せば指ド部にはもはや信頼することはでき
ない。

二 三 理 塚 斗 争 は 革 命 の 原 基 形 態 か ?

「革命は労働者の自己解放の事業である」とい
う自明であるはずの原基に再度立ちかえり、三理
塚斗争が何故に原基形態になりうるのかを考えて
みよう。

「前進」三七六号の政治局論文は、その媒介環
として三理塚を軸とする反戦斗争に對してかけの
れさつとしていた破防法適用の攻撃を位置付けま
いる。日本前日主義者共は重大な危機に直面して
あり、その危機のド真中に真正面からぶつかる斗
争が三理塚を中心とする全労連と反戦青年委員会
の斗いである。従って、ここでの破防法攻撃は日
帝の死命を削るものとしてあり、ここに己れが
倒れるか相手も倒れるか、即ち日帝打倒は日本革
命の打撃が所在するといっているのである。

反戦斗争は展望があるのか、と對するへ返
し如き、安易な所論者本隊での斗いの絶望の上に
對置され、街頭主義を奨励した生産点斗争の叙

IV 火 災 ビ ン 斗 争 は 何 を 教 之 べ か

「火災ビン斗争のどこが間違っていたのか、そ
の後、合法主義に転落したことこそが反革命の
根」と本多書記長は非公式の席上にしるを言して
いる。(四月一日日 茨野発言)「前進」三七八
号田川論文も同じ論調である。

スクラムへ示すこと。棍棒にも限度があり
石の衝突の限度をみえすいてきた学生は街頭行動
の斗争形態に於るゆきつまりは、次に必然的に火
を用い始める。現に壬子、三理塚では火使用の
前兆が現われている。暴団の刀で躊躇を怠りし
学生は危機感は一途にテロへとエスレートする
のだけだし当然の持ちゆきである。政治方針の
すところである。4月号日神闘争に於ては、す
でに東京では下りラ的交番襲撃が行われている。

「日米關係は日帝にとって重要無比を占めること
は事實(後述)といはれ、三七六号論文の基礎は日
米關係の破壊へ基地をめぐる(即ち日帝の根底的危機
という情勢把握の上)にそのこの破防戦の延長上に革
命を想起する根本的意識の思想である。旋環政府
ブルジョアミーの政治的メンツをぶす現地ニ基地
斗争が一定の政治的緊張關係をつくり出すといふこ
とと、日本資本主義がそれによって根底的に動揺す
ることとの間の深い交しを認識することなく、政治
暴力の上野部とひとごりの求差した学生、反戦青
年委員会の暴団とのぶつかり合いにすべてをかける
傾向は強固な歴史は知らぬ。

マルクス主義のこの逸脱は打たれたいではない
か。日米關係の破壊をいしは悪化は日帝がけける
マイオス要因があるはずは、その時こそ労働者本
隊としての組織的斗いを広く深く生産点において組
織するべく組織(N.C.)のまさに全重慶をかける斗
いとして斗われたいは知らぬのだ。そしてや、四月
10日M.W.反戦委員会において、反戦青年委員会の大
衆化を提議する仲吹同志に對して「労組組合に於る

業は許されたい。反革命的なナール急進主義の指頭
は粉砕されたい。

一方における以上のよう斗争の論理(持ちゆき)
かつくる必然的帰結としての火の登場が予想される
事象、他方においては日共の火災ビン斗争を
めぐる情勢、情況と現状のそれとの類似性から現時
点において再度、火災ビン斗争、かつの教訓を認識
しておきたい。

二 49 33 年 における 火 災 ビ ン 斗 争 の 情 況

大阪においては枚方市の火薬工場襲撃にはじまり
吹田の人民列車あるいは伊丹の飛行場襲撃、交番及
び重傷基地おとしとして斗われた。また取場におい
ては、日頃圧迫感を感じさせる取柄へのつるしめ味
斗争が日共覚悟を叩きこむところまで展開された。
一、党内には党内秘密軍組織としての「組織

するものがつづいて党内の監視が厳しくリンチが横行した。最近幾々と判決の下でいられる〇〇事件があるのはほとんどこの時の出来事だといふのである。

二 当時の情勢把握

50年5月、朝鮮戦争による日本の非合法化が「団体複制法」の適用により強行された。一方では敗戦後ゆめが数年前にして早くも極東の緊張が生じる中、朝鮮戦争へはコミンモレが現実大の道義的燃焼感、レフト・パースを原動力とする有力の狂暴の弾圧が、他方各種別の崩壊からくる右翼幹部の抬頭、同時に進行するレフト・パースでの覚醒、ミンクの取柄からの追放による無感感。これが火災センターを支配する物議的基礎を形成していった。「中四節節」の成功的影響はかなりの革命近しいものだが、しかし覚醒のすくいのない現状からの脱出に光明を与えるものとして主観的激進の域をこえて信じこまれていく過程をまた一途に火災センターを扱げる自己を合理化する作用を果していった。軍事基地撤収の理論的裏付けと

して、劉少奇ラーはまずわが日本に対する植民地規模があらった。
これら諸々の諸情勢、諸状況はしかし覚醒ではあつても原因をばい。原因はひととくに党内における分裂、所感派と日米派分裂による所感派の勝利、つまり所感派のつづいてくる小ながらない革命、延々と続く革命運動への絶望から軍事的規律をこつて武装入向の暴動の論理が前述の諸条件に若し心覚醒の燃焼感と結合した結果といえる。

二 火災センターは何故まぢがいか

基本的な認識は、火災センターが大量不慮の死亡を及ぼす少くも精進主義以外のものはなく、このことは明かである。
ブルジョアミーとプロレタリアートの生産線における斗いに代つて、ブルジョア機構の一つである軍事基地、交番等へ人・物・金・力等の武装集団の衝突を革命成りとする代位主義があつて、この斗態は、たしかに短期的には、火による物議騒然として社会不安をひき起はするが、長期には、運動及

び主体の破壊として結果しえな。近頃は革命は次

才才にますます遠方にいりどき、ある日ブツと我に帰

った覚醒、シンパは斗うに足場なく、労働運動は右翼幹

部の支配下に右傾化を深めていうのに気づく。前任党

覚醒の自己崩壊、従つて大量組織の破壊は必然である。

自己絶好化から生れる、あるいは覚醒と緊張状況になら

ざるために必要とされるのは、他党派攻撃であり、当時

は社会主義打撃論が、現在はマント主要打撃論がその役

割さになつてゐる。他党派攻撃のエスカレートは、次に

自己の組織の中の敵をさがせ、リンチ、首問、党内暴力

が公然化する。(一)組織の存在基盤(二)

内部を整理してみよう。

セネスト志同の放棄から生れる軍事主義(三)毛沢東主義

はまず何よりも、先進国に於る労働者階級の行動様式、

団結様式の無視、破壊であり革命的論理に見るならば、マ

ルジョア革命あるいは農民革命の論理といえる。この形

体は、労働者が少数であり団結の思想をもたない国では

一定の有効性をもつ

しかしこれは、先進国に於るプロレタリア革命を裏

あるいはブルジョア革命に支障を及ぼせる反革命として登場

する。

二 前任リーダーの武装(反対)

基地がある以上、それが戦争の中でプロレタリアン

れてくる。これに対応することは絶対に必要である。(一)

こまではだれもが納得する事だ。

しかし(二)で日米関係の具体的な把握がなされる場合、

すなわち日米関係の経済的、政治的、軍事的、イデオロ

ギー的な総合的把握ではなく、基地という形で日米関係

が具体化される場合、結果としての火災センターが「合

理化」される。

しかしこの時こそ、総合的な大量斗争が問題となり、

またその可能性を内包してゐる時でもあるといふ二重性

を確認しなければならぬ。

を

大衆斗争にこそ活路を見出すべきこの時に、大衆斗争の放棄、少数精鋭の「武装蜂起」は兵力による大衆斗争からの切斷をまねき、前任そのものの武装へとエスカレートする。我々には、コミンコン、ソビエトに支えられた大衆の武装へ大衆による大衆の武装こそ追求するべきであって、前任自体の孤立した武装は結果としての運動破壊を生み出すことをはっきり自覚し、断固反対するものである。

根柢・投石、火と刃の斗争形態は、絶対に固定化されエスカレートさせてはならない。我々がめざすのは、1940年代の少数者革命ではなくて、労働者階級のゼネスト、

その上に立った蜂起という多数者革命でなければならぬ。もちろんこのことは、アメリカの黒人暴動のように大衆自身が自らの「生活と権利」のため武装して斗争には用いなければならない。コミンコン、ソビエト等の労働者評議会の理想的形成を抜きに「党だけの武装斗争」は革命運動破壊である。「革命は反革命を呼び、それを突き破って進む」という言葉を解明にもって進むのはやめるべきである。根柢路線は、極大な犠牲の集積という結果のみを残して、自滅する運動が残っているだけである。

IV 反戦青年委員会と併竹組合（併竹者本隊）

二二〇〇の位置づけは何であったか

NC三回大会報告は（イストロ）現在の反戦政治斗争における、反戦青年委員会の意義と役割を次のように規定している。まず第一に、反戦青年委員会が社会的合法性を保障されており、総評系^{併組}の青年部運動の全体的動員を可能とする大衆統一戦線であること、第二には、しかしながら労働青年部における革命的左翼の一定の組織的前進あるいは全学連との共闘に支えられて、社会的政治斗争のわくを細目的にのりこえる条件があること。従ってNCにおいては、「反戦」もこの過程的な二重性を徹底的に拡大発展させること、戦場からゼロ年斗争をつくり出すことに一切の努力を集中することによって、三全総路線、即ち革命的労働運動の所在と党建設を反戦政治斗争的課題の中で、追求すると正しくも規定したのである。

「反戦」への面の二二〇〇と反戦

日韓斗争の中で誕生した「反戦」は沈滞した街頭政治

斗争に多数をなげかけるものとして登場した。その後激化した市民の動揺としめつけ、更に革命的左翼の方針の未確立（林子を戻る…）等の諸

は、せっかく生じた「反戦」をその後（66年2月〜8日）閉店休業状態におとし入れてしまった。ベトナム戦争のエスカレート、日本政府の一方の加担、沖縄問題のグロースアツァ…の情勢の教化が進行する中で、市民・スダーリニストの無対応、無指導は改めて「反戦」の存在を認識される土壌をつくり、一方で革命的左翼もまたゼロ年が射程内に近づくと過程で、やっとなら「反戦」への夫々の方針を打ち出しはじめた。ここで打ち出されてきた方針は直接的にはマントに結集するルンペン活動家の「反戦」へのなればぬととの身軽なによる街頭斗争がその主軸になっていった。加えて全回反戦の體の重なり（市民のシメツケ）はデッチ上げ、カキ集め地区反戦への反戦路線へとマントが方向性を示す中で、地区反戦づくりにかける従来斗争を教化させ、斗争内容・形態は、三全総路線の現地斗争主義のありから「反戦」と全学連での

現地斗争を又入と要請していった。またその戦争の救世

と日本の加担は、日本国内に入る。基地の役割を大衆

の前に否然なく見せつけるに及んで、現地斗争を

二に突入してつづける。

この時、Cが前項の如く位置づけた「反戦」へのかか

わりが身の軽に「反戦」の脱却斗争にかつことを至上目

的に大転換をよびるのである。神戸反戦をみてみよう。

出発点に於ては、デッチ上げの傾向が強くても、方向性

としては大衆的の労働青年部に支えられた「反戦」を

やし、急遽にそのキャンペーンを埋めつつ、しかも現戦の斗

争に最大の力を参加して行く。あるいは現戦の斗争の中

に「反戦」より一日も早く「反戦」の旗を上げること

に重きをかけた結果が、強引な反戦脱却へと結果したの

ではないか。原則的はそれをふみにじった場合、真の目

的を達成しえないから、この原則であつて、これを無視す

ればどんなことになるのか。それは原則として不用では

反す「改革」派に至つては、もはや論議の余地もない。

また「七〇年斗争を、止し、斗争をまために」反戦「

の」がモトをとする「」まちがつていては、他党派反戦は

「」。革命的左翼内での党派斗争に勝たずして階級

斗争にはかたない。「」東京では地区反戦の中へ、

「争いで勝利してつづける。地区反戦集会において、行動

隊前へこの台図で「」に據上につめ寄り、この台図で

つめ寄りヤジの中で他党派といえどもそこを無視できな

くなくしている。「」以上阪奈委員会の木下発言」と

くく」と語られる。労働青年部をこきよめただけ含み、大衆

化した反戦」とこの言葉は現在の路線の下ではどうなる

しがない。

二 現中央路線下において 神奈川型反戦の道は可能か

「」の中にあり、中央路線に反対する入達の中で「神奈

川型反戦をめぐせ」という主張がある。神奈川型反戦が

三回大会でのN.Cの方針にもとずいてつづられている以

なにか。

二 身軽な反戦は危険なものと表裏一体

——危険性の拡大——

「」人いれれば地区反戦をつくれ」でつづらんでもめ

めでもかまわれない。我々には思想性、大衆性があるから正

しい」とこの言葉を木下田中やち、小西の書記長から何

度も聞いた。またつづらんのパカラレをつくれ」とも入

日、日東京での本隊発言「」これらの言葉と、三回大会に

おける我々の「反戦」への位置づけとどうな関係を思つて

出せるとこののみ。長々とした解説を加えるまでもな

らう。これらの言葉の意味するものを教分面でも「

」熟考すればよいことだ。七〇年を斗争部隊は、全層連反

戦、その他回防、市民、農民である」とこの図式が大手をひ

つてまかり通り「なせ回防だけなのか」とこの向に「

」かの単層に「」があるのか」ととなり

——次頁へ——

上、当然にも生れる主張はあつた。が、現時点に立つて

我々は残念ながら非常に無念ではあるが、この主張にも

くみえない。なぜか。その解答は、「千人の労働者

が千人になつてもこの路線を貫く」という本多書記長の

言葉で明らかだ。「七〇年早急保をいじめる労働者本隊は

回防だけ」という木下田中の言葉を追加すれば明白では

ないか。現在進行してつづける路線が、労働者本隊の斗

争の絶望の上に成立しており、自分は労働者であることも勞

働者を「戦斗的市民」としてしか位置づけられないものであ

る以上、ここで使われる労働者という言葉は、スラングであ

る。言葉の芸術に迷わされてはならない。

「」神奈川型反戦が、現在の中央指導部の下でつづける路線

の中に、いかに不可能であり、かつまた神奈川型反戦

をめたすことがいかに中向主義でしかないのかは、次の

三回大会のこと。

「」キーポイントは、何よりも、神奈川型反戦は中央にとつては

日本主義としてしかつづらぬ故に打倒物なのだ。な

せむじめ、生活者の闘争の上には必ず労働者の闘争は

「工人いれればくれ」といふ反戦、教員の軍団「これ隊長の命令一下、石を投げろ」反戦、中核反戦とは全くありはれないものであり、労働者反戦青年委員会、そんなものにたいするはずがないのである。この点は、神奈川反戦は多くの単組青婦部の団体加盟をもって構成されてあり、そこに労働力も労働者性も存在するのだが、こともあろうにそれを、清水中央政治局員は「社民とペタペタの反戦」と唾棄してこの世にこの世にある。従って、左翼社会民主党と労働組合との統一戦線においてのみ反戦青年委員会の大衆性と労働組合性を保障しようとする段階において、大衆的地区反戦を追求したならば、必ず中央官僚による「社民とペタペタ」といふ攻撃にたいしてはいる。我々も全力で奮闘した三月四日東部反戦青年委員会が「ついでついでついで」である。京都反戦に対して中核派の攻撃がなされたのは、この事件も発生している。神奈川型反戦をめざせといふ人達は、中核反戦、NCC反戦の二つ、実際に「NCC反戦」を動かしているものは、NCCに集まる「NCC」活動家と、現地の決戦＝革命とおぼすNCCのメンバーである。その階級闘争としての反戦の旗をまくための「ロカミ」のころがえり、労働者本隊とは無縁な立場にあるものを根本的にみよめぬならば、事の真相は明かされた。「反戦」といふ名にのみよせ、過去の幻想を遺るのは現地の階級闘争ではない。NCCの誤った方針をくくめる毎に現地斗争部隊を構成し、NCCの誤った方針を一旦強化し、労働者を街頭のみにつれ出す以外の何かのこともない。

「このころがえり、NCC反戦の斗いを本隊に逐流させる」と何が本面的に不可能なものかと把握する。実践的帰結は「NCC」にかなない。反戦青年委員会という媒介項を失うNCCには、さきほどのいかに「NCC」でも、労働組合自体を中核化する下か、NCCの斗いを本隊に逐流させることができない。NCCの斗い、外か、NCCの中、NCCの中、NCCの中、外か、NCCの中、本隊の中に中核をいかに生じて、組合全体をいかに動かすかという原

意味のあることを、だましくかたしてはならないとしか考え

られない。再考を望みたい。
その中には、神奈川反戦が多くの単組青婦部を中核部隊として、レトリックや密生に発言権をもたせているのにならなくなっていることはどうしてなのか、についての認識が不十分であるが、看過されている。労働者階級の内部での党建設という視点からみれば、神奈川以外は全国的に見て神奈川型反戦の前期段階にあることを無視してはならない。我々は「NCC」に力点をあてよう。

労働者反戦政治斗争を追求しよう

「神奈川型反戦をめざす人達はいっ」「いったん本隊の中にいって回戦せよ。リベリオン、声明に対する大衆の議論における勝利感。リベリオン進歩主義を包括した大衆的闘い、即ち、カンパニヤ斗争を大衆的に闘い抜くことが必要」と。そしてすすむ。この地区反戦から、手を引くものといふ、我々東部への批判を行っている。しかし

別に何が変更も不用だ。我々のもつ力量にしっかりおまよ、それを基礎に労働者本隊とともにいっ強く反戦でネスとに向う。この闘いは、
4月25日、関田地方委員会の席上、神岡同志は「東部反戦が手を引き、反戦教師の会に入ることか」について「NCC支部を批判した。問題のやりかたもいって、NCC」反戦教師の会が日教組大教組の反戦斗争を一手でも前進させるものであるが、我々は全力をあげるであらう。少し大衆化することは、本下中央には「社民、構文とペタペタ」とたたかれない。NCCの東部反戦に力を入れたとしても、オルグ、参加して来た「NCC」に何と説明すべきかを神岡同志は考えている。そして「NCC」の地区反戦が「NCC」のなかで、問題のなかで、我々が地区反戦に参加するとは、その地区、分会の教組青婦部の正式加盟を獲得しようとするのみにあらず、この追求が反戦青年委員会の本来の任務である。我々東部の中で「NCC」に

階級と階級戦争とは同義語である。労働者階級戦争「を」
「階級戦争」の目的である。つまり階級の階級闘争は
階級闘争の「階級闘争」を破壊する「こと」にしかかな
い視点からも現在の階級の階級闘争に反対する。

△ 階級闘争としての春闘の放棄 — 政治闘争としての春闘の整理 —

これまで階級の放棄を主として反政治闘争の中から
追求してきたが、春闘のみなかたにある現在労働者の賃金
権利闘争に對し、この路線がいかなる影響を与えている
かを次に検討してみたい。この春闘までは、他党派、
とくにマル成派によって春闘を重視する我々に対して、
聖済主義、労働組合主義、もの取り主義という批判がな
されて来たことは記憶に新しい。我々は反スタ他党派か
らの聖済主義といふレトリックに對しては、我々がそれら
他党派より労働組合運動を少くはよく知っており、労働
者内部に根を下していることの証明として誇りをもって
うけてきたのだ。だが、今、中央政治局からの我々労働
者同盟員への攻撃の台言葉は、「政治的組合主義はインス
ルビジョアの聖済主義だ、労働者主義だ、」である。この
言葉の意味するものを分析し、判断しうるものだけ各自
らの立場に責任をもてようのだ。

一 労働者総体として春闘はいかにあるものか

「階級主義打倒の斗争として春闘を組織せよ、」へ前
述の号（といふ）。言葉だけ口癖しい政治的改良主義
が突如として主張されるはじめている。レーニンがロシ
アの労働運動の高揚と衰退を分析し、高揚期の運動力は
強力で石炭産地、ライキの基礎の上に政治ストライ
キがぞびえ立った所に特徴がある。ストライキ統計が
らみたロシヤ労働運動「こと」にしていることはさておいて
も、この主張はこれまでの春闘が日本の労働者階級に對
して持っていた役割への主體的なかわりが欠如している。
「こと」日本の労働者の階級形成に對して春闘はいかに弱
さを言まよはせる。次のような基本的意義をもっていた。
オナーに「春闘はいかなる斗争よりも多くの労働者3千万
中50万人」を斗争者として組織させてきたことである。
オナーには春闘ではまず30万人の労働者が労働争議に

参加するといふ最高の階級斗争の場でもある。労働者が自らの階級的目的の達成をつかむのはストライキにおいてであることを考えてみよう。その場こそ春闘なのだ。

オーストリア 春闘は単なる賃金斗争ではなく、下都活動として一年中のつもりもった不満、要求を一挙に提出してゆくという「最大の活動の場」である。反合理化現場斗争、諸重末現場交渉も春闘期間中でこそとりくめるといふのが現実の民間企業内の事情であった。このように労働者にとって春闘は巨大な階級の意義をもっていて、だからこそ、プロレタリア本隊の中に深くケルンを創りあげようとする我々は労働組合主義、もの取り主義、経済主義とののしりあひまうことも、春闘に最大の党的力量を投入してきたのだ。関西に於ては昨年11月末より「春闘ニュース」を発行し、1月中旬には『火花』の発行と同じ上旬に「春闘討議集会」を開催、その他ステッカー、貼りやビラ入れ等々と精力的に腕として春闘にかかわってきた。

いまかせる思想は、一見ゆ度転換し、突然「職場・学園」にもどれ」といふジグザグを生む。このジグザグがひきまわし、官僚主義的に行なわれるのが日本の歴史である。我々は「ソート」するべくメスを入れて来たではないか。春闘の最中、もっとも現場大衆と共に「ソート」するとき、街頭にありけれ、春闘の終局面に「現場大衆の中へ」といってもそうはいかない。労働者意識とその上に立った労働者ひきまわし思想だけが一貫して居る。

「昨年来の公務員賃金論」の中心は中央の口と及び小田同志の対立を思ひおこそう。「帝国主義打倒の立場から公務員賃金も取りかえさなくてはならない」といふことを繰り返して、具体的には公務員賃金方針も出し得るのことは何を物語るのか。のみならず、それを検討しようとするこの自体を「ソールジョアの経済主義一度」難い労働者主義、教組は全体的にかんである。つぶせぬ教師、労働者ではない、先頭に立って地区反戦を、と無責任なやり方はない、三投論法をもって打ち出される地区反戦路線を我々は拒

春闘にかかわれない指導部弾劾

にもかかわらず、一昨年、昨年の春闘の停滞を自ら破るべき春闘に於て、これらほどに一つとして貫徹しえていない。否、関西指導部は基地における現地斗争に労働者をひき出し出すことこのみ考慮し、春闘を党として行うことなかり思ひもさらなかつたのである。公労技、女運共闘のオーストリアにあたる4月21日を前に開かれた地方委員会でも王子斗争にのみ提案は限定されていた。国鉄5万人首切り反対斗争、M.Wの労働者のみにかせ、日教組の文教三法斗争についても「何も知らぬ」のだ。

として政治斗争の一部である基地斗争を政治斗争と等置し、経済斗争や文教三法その他の政治斗争を放棄し、敵対して「一切の突破口は」三里塚、王子にある」と労働者の街頭斗争に埋没してしまつた。日本のあつたやかな形での街頭主義に反対し、N.Cの一極主義的形態での街頭主義が存在するのみではないか。生産者と労働者と資本の専制

否するのだ。

一見正しいかの如く見える「帝国主義打倒の春闘公務員賃金」といふのは、春闘及び公務員賃金の歴史、労働者の主体的状況を一切無視し無知した超主観主義、客観主義のアシ外交以外の何もでもない。「帝国主義打倒」と呼ぶが、春闘、公務員賃金が階級的に離れられるのであれば、我々は何百回でも言う。

教師は労働者ではないソートして

本中中央の口を聞けば「教師は労働者ではないソートした」と言う。何のためにそれをいふのか。「ソートした。だから政治のことも考えられる。他産業のM.W.が、前進で、赤旗のちがいはらにはわかたつたやうな長なれるM.W.だ（1980年）地区反戦をつくり、現地斗争の最先頭にたてる。」といたのである。たとえ一日でも、如何様子を時間続けちゃつてみたら「教師は労働者ではない」といふ言えたものではない。それを毎日毎日、

毎年毎年くり返してゐるのだ。鉄鋼独占の新鋭コールド。教育労働者運動という異議と立場を根柢から否定し、教育ストリックスミルの操作台に上つた形労働者（オベレータ）と教師のどちらが肉体的労働者か見てほしい。地方では「地方」で反戦・現地斗争の最前線に上つて」といふことは「さうして首を切られよう」といふ結論に上つてゐる。では如何か。木下政治高貴と「教育労働の規定」をめぐつて論議する気もないが、「マル青労働・教育インテリゲンチヤ委員会」ではないのは何故なのか。前任（転革）の言ふことを少しでも聞かないか反対すれば、その支那、個人をいじめ、つぶせつとまでする愚者行動様式の様式にあるものは何なのか考えをほし、ほかの産業の「おれでは、前進」と、市旗のちがひも十分わからない。しかし教組ばかりかよつた気だけでもなる。「このためには、ためにする教師の特別視であり、それ以上に許せないので、他産業の労働者同様の判断を許さうとせよ。」政治の奴隷性は許せない。

中央の「教師インテリ」談は我々の「此までの

VI 労働者主義我打倒は何を意味するのか

「労働と神奈川のマル青労働」に対する中央政治局の陰謀な攻撃・弾圧の愛用語は、「経済主義・労働組合主義・労働者主義」である。物価上昇・労働強化と労務管理の質的強化の中で、労働者大衆が賃上げ斗争に「石炭の闘い」をこめて打ち上るのを強化することを「ブルジョア経済主義」と攻撃することは、攻撃者が労働者大衆の労働と生活が「完全に分離し敵対した地点で」生活「してこのことを証明し、自ら「度しがたい俗物的政治主義」に陥つてゐることを示している。

我々に対して「战斗的労働者主義」という非難がなされるのであるが、我々が革マル派と分裂した一つの大きな契機が、彼等が労働組合とその運動を「党のため」の道具に利用されるべき客体としてののみ、みなしたことの反対であったことを考えれば、いよいよ三層総路線はどこへ行ったのであろうか。

教育労働者運動という異議と立場を根柢から否定し、教育労働者運動を「ストリックスミル」の操作台に上つた形労働者（オベレータ）と教師のどちらが肉体的労働者か見てほしい。地方では「地方」で反戦・現地斗争の最前線に上つて」といふことは「さうして首を切られよう」といふ結論に上つてゐる。では如何か。木下政治高貴と「教育労働の規定」をめぐつて論議する気もないが、「マル青労働・教育インテリゲンチヤ委員会」ではないのは何故なのか。前任（転革）の言ふことを少しでも聞かないか反対すれば、その支那、個人をいじめ、つぶせつとまでする愚者行動様式の様式にあるものは何なのか考えをほし、ほかの産業の「おれでは、前進」と、市旗のちがひも十分わからない。しかし教組ばかりかよつた気だけでもなる。「このためには、ためにする教師の特別視であり、それ以上に許せないので、他産業の労働者同様の判断を許さうとせよ。」政治の奴隷性は許せない。

二六の年安保斗争の教訓

労働者のゼネストとして

我々が安保ブレードを打ち出したのは安保斗争に対して次のような厳しい批判を行った。①学生運動（大衆運動）の戦斗性の延長線上に前線建設・革命を想定してはならない。②首相官邸等の突入を自己目的化するものは極左フランキズムである。③学生運動の後に「ファントム」系の労働者をつつけるのは街頭主義である。④さういふことでは、大衆運動が盛り上ってもプロレタリアート自体が「ファントム」の核に埋没する悲劇を生み出すだけだ。⑤ブレードの核心は、「ファントム」急進主義にすぎない。⑥ブレードの核心は、ファントム急進主義にすぎない。⑦ブレードの核心は、ファントム急進主義にすぎない。⑧ブレードの核心は、ファントム急進主義にすぎない。⑨ブレードの核心は、ファントム急進主義にすぎない。⑩ブレードの核心は、ファントム急進主義にすぎない。

主義がらの完全な訣別をかついていないからだ。と批判してきたのである。これらの批判の核心は今にいたるも正しい。オロインターの反合理化斗争、バンドの安保決戦論の論争に対し、N.C.が「生産高での斗争というものをどう考えるか。生産高におけるストライキということとは、それを準備する中核なくしてはできないことなのだ。労働者の外から方針を出したり、シヨックを与えても無駄であり、誤っている」としたことを現在のどのうとらえかえすべきなのか。(日逆流に抗して)等々参照) 60年安保斗争の教訓は、4国労ストまでもがチブリスローガン(民主主義的段階)におぼれこんだこととの突破、労働者階級の真の主力斗争(ゼネスト)をいかにつくり出すかにある。職場・組合のストを通過しないので物情騒然たる街頭斗争に労働者が何々にあるいは進んだところでは分層ごとに参加するという路線では、労働者は革命の主体であることを忘却させるたけである。という教訓である。反戦青年委員会も、スト

るゆきずまりを本能的に打倒するものとして打ち出された。そして革マル派との分裂の中で、自己以外は打倒対象に反革命として「他党派解体のための統一行動」論にみられる唯我独尊の党派性主義を克服していったのである。(日全総 イス下の)と思えば、三全総路線に戦斗的労働運動の防衛は、単にN.C.のゆきずまりを打倒するための役割を果たしただけでなく、労働者大衆と前征、労働組合運動との現実的接点をくりだしたのであり、「先進資本主義国における党と労働組合との関係」を端初的にはあれ、つぎついでにこれをよつとしたところに巨大な意義をもったのである。いわば、60年安保における本質的修正(生産高)ゼネスト論(62年秋の三全総)より血肉化(具体化)して打ち出されようとしたのであった。革命的労働者の建設が本道でないことを経験の中で身にびつかつて知り、本質論的なプロレタリア像が現実的な労働運動の場を点検されおとしたのであった。「共産主義者」なるもの(本論文、北川論文は

収をもち親組合との関係において再検討せねばならないのである。60年安保斗争をもつぱら物情騒然たる斗いとして描いたり、「千人の労働者が大阪で決起したら……」(本多書記長)とか、「全米軍基地に対する斗い」とかに単純化しては絶対にならない。いかに困難であったとしても目指すべきはゼネストである。ゼネストの實現過程においてしか革命との接点を現裏につくり出すことはできないからである。我々はそのための組織戦術を徹底するための全力を投入せねばならないのである。

三三全総路線の精神は何か

62年9月の三全総路線は、それまでの反帝・反スターリン主義の労働戦線での斗いへの直接的なあてはめ、とくに反タラ斗争の自己目的化による労働組合員大衆からの遠隔として「党としての斗い」と固く結合しない「党のための斗い」一本槍による労働組合、労働者大衆の客観的(労働組合、労働者大衆は前征)によつてゆきかけられるだけの客観存在(という赤色労働組合主義)によ

「汗の教訓」である。それであるにもかかわらず、3月11日の全国常任委員で清水政治局長は、「こともなげに三全総時代からの労働者同盟員はとくに問題がある」と放言し、労働者主義を弾劾するのである。

二労働者主義打倒の意味するもの

一人の人間が他の人間「O×主義」というレッテルをはりつけようとするとき、その反語である「X×主義」が無意識的に「良し」とする価値判断がある。労働者主義への対置語はいつまでもなく、職業革命家主義、学生運動主義、ファナル主義等である。「労働者主義」という言葉が退治すべき悪悪思想としての意味をこめて前進社内で氾濫していることは何を意味するのかが、

職業革命家のいつてをいちいちもつとも聞き、毎冬「下」ロマネスミ」のよりに走りまわる主体性喪失の労働者革命家となければならないのか。技能上の「指導」被指導「は認めねばならないが、あたかも無謬の職業革命家が厳と存在し、具体的に固定した「指」被指」はスターリ

主義者がいかに何物でもない。反対するものは直ぐには不信任してみろ」(木下)と聞き直さし居ては、それを何と云うか。我々は、NCに「どういふ人間がいた」とき本当に悲しく思う。労働者が外部指下部の改革にいよいよ「労働者主義」を本能的に行使するのは、さうやたらとではない。職場、当該の組合の状態を細密にわたって我物とすることができない外部指下部の改革が出来たときまた方針が職場にもち「正」ことが相当「正」とも、労働者同盟員は「自分の方が目覚、こいさんだなあ」と心の中で感じて、その方針を物産化しようとするものである。だが改革の出発路線、方針が現在の労働戦線によくもあしくも現存する状況とあまりにもかけはなれ、その方針を實踐するや、自らさ々と築きあげてきた基礎を一挙に「さくすくす、それどころか自らが職場からはいきとばされてしまふとわかるや、本能的に「ゆるゆる」労働者主義」を行使するものである。それとも、その改革が願がらうとて職場の「ゆるゆる」労働者の重なる「ゆるゆる」

いせが、分りもしないで強引に官僚主義的の方針を押しつけようとしたときに、行使するのである。労働者主義が発現する時は、そのいずれかの場合だ。それ以外の時に組織人としての労働者同盟が労働者主義を乱用した場合には、厳しく討論してこえなければいけません。改革が「労働者主義がこた」といつとき、改革(外部)と労働者(内部)との間に相当の無理な緊張関係が生じていることに無反省であつては、官僚主義、行政処分路線、ひきまわし主義が生じざるのみである。現在がどうである。そして、労働者同盟員の論議にまではならない本能的抵抗を強制的に物産し、その上に出来あがった党は、もはやプロレタリア党とはいへないかたがたの組織形態となつてあり、スターリニスト党である。そして、その思想と行動様式は、生標軸の定まることのない左右に揺れ動く「チアル主義、街頭政治主義」なのである。NC指下部は現にどうなりつつある。現地激突と生産点大衆化という左右の戦術はゆきあまりをこまかす手であり、そこにはもう運動推進の原理が失われつつある。もちろん、我々は「ゆるゆる」労働者主義にはまりこむ政治の力を意識的に拒否し、プロレタリア民衆主義の力(労働者自治、生産民衆主義)を目的と手段が一致するものとして将来的にも、現存前にも追求していく決意をい

Ⅵ 悪名高い「先鋭性理論」の復活は許せない

— 学生運動の思想と行動の変質 —

戦後以来の学生運動の戦術の「エスカレーション」は、当業者が自覚するべきことを向かわせ、NCの学生運動に「この思想をなくす」に要請をせよとした。換言すれば、中核派の学生が、自らの生命と生涯をかけて「吉松の斗争参加」の中で、その行動様式に含意される思想をもとに「限界状況の巨額」をこころいさるべきである。限界状況の行動の持続は、その意味するところである。この向に於ても厳しく緊張関係が持続しなければ、精力による素朴な闘争主義へと転落する。在世紀以後から来た「戦術的思想論的意味」は、厳しく「検査」の必要がある。この

人散華の世保マインドを乗り越えるため、NCが教訓として打ち出さざるを得なかった学生運動に「この思想的立場は何か。それは何れマインドの理論的「形式」を以てなめたか。それは、日々の実践戦術「か」にこそあつた。ギンギンと重なり、プロレタリアートの向うの戦術を打

ち出したのである。この「先鋒性理論」としてこの中の
学生運動」とは、初代委員長武井昭夫の提議したものであり「武井理論」と呼ばれ、スント全学連までの伝統的理論であった。オニジは、オ四インター系の主要教で、五八年の全学連大会にて打ち出された「軌跡路線」の主要な軸としての「先鋒性理論」の否定である。ZCは、

この先鋒性理論、直接の運動場の天竺論、街頭であれ、スト支援であれ大衆運動としての実体的提議としての思想（を、前任党を標榜させぬ大衆運動の目的的一戦線の理論である）として否定したのである。これらZCの提議は、東隊の運動の展開に於ていかに不十分にか裏切られていたことはいえ、オニジと学生運動との関係、民主主義のゆくから学生運動の土俵へ移して考えるという意味に於て、オニジがオニジに、これらZCを、中保メイトとO五社線ZCの教訓であったのである。ZCのオニジの軌跡路線を打ち出す、オニジの根柢は「労働者階級の解放は労働者階級自身の作業である」とオニジは、中保メイトが論理として主張したのである。

「Oニジは、東隊の運動の展開に於ていかに不十分にか裏切られていたことはいえ、オニジと学生運動との関係、民主主義のゆくから学生運動の土俵へ移して考えるという意味に於て、オニジがオニジに、これらZCを、中保メイトとO五社線ZCの教訓であったのである。ZCのオニジの軌跡路線を打ち出す、オニジの根柢は「労働者階級の解放は労働者階級自身の作業である」とオニジは、中保メイトが論理として主張したのである。」

「Oニジは、東隊の運動の展開に於ていかに不十分にか裏切られていたことはいえ、オニジと学生運動との関係、民主主義のゆくから学生運動の土俵へ移して考えるという意味に於て、オニジがオニジに、これらZCを、中保メイトとO五社線ZCの教訓であったのである。ZCのオニジの軌跡路線を打ち出す、オニジの根柢は「労働者階級の解放は労働者階級自身の作業である」とオニジは、中保メイトが論理として主張したのである。」

「Oニジは、東隊の運動の展開に於ていかに不十分にか裏切られていたことはいえ、オニジと学生運動との関係、民主主義のゆくから学生運動の土俵へ移して考えるという意味に於て、オニジがオニジに、これらZCを、中保メイトとO五社線ZCの教訓であったのである。ZCのオニジの軌跡路線を打ち出す、オニジの根柢は「労働者階級の解放は労働者階級自身の作業である」とオニジは、中保メイトが論理として主張したのである。」

のみの細に、という幻想の構造が成り立っているのでは
ないのか。従って、要するに首を嘗てやるかどうか
という劣弱者同志に対する煽めは、完全に反。白レタリ
ア的であるのだ。我々は現地斗争や基地斗争を一般に
否定はしない。だからこと遠去は何度も劣弱者を現地に
送ってきた。

だが、現在の現地路線とその位置付けにおける基地斗争
(現地斗争)一本権には完全に反対である。「革命は勝
手におこそうと思っても起せるものではない」(ローザ)
のだ。我々は、「何故学生は革命の主体になれないのか
を再び深く考えねばならない。中核派の同志諸君が、文
字どおりの血を吐くような苦痛をもって行動しているこ
とが、実際に何を生みだしているのか。そのことま

まに血を吐く思いで熟考してほしい。またしなければ
ならないのである。「今の今、おれの如く立っている
行動、その思想が現実に生きていっている革命上の影響
はいったい何であるのか」ということを、そして自

VIII 一面的な情勢把握 II ベトナム戦争とトル危機

それ以前にもみられたとはいえ、10・8以降「前進」に
の情勢分析は、単なる政治的アンティションのネタとな
つてきた。危料を吐き、言葉の激刺だけがエスカレート
してゆくのである。今やもう「死の苦悶に溺れ」(前進)
三ハ一号)、情勢は「前革命的情勢に入っている」ことに
なっている。だが「ここでは、左翼一流のハツタリによ
つて全体的な情勢が二面化され、部分的なものを全体とい
くための手法が意図的に採用されていることが先ず分る。
我々は「資本主義が死の苦悶に瀕し」「前革命的情勢に入
っている」という評価は完全にオーバーな表現であり、賛成
しない。どうして評価は劣弱者層内部で「前」の地獄
のゲレンデに転換し「前進」は「前」の地獄に
をやる実践的帰結を生むのである、マルクス主義でない

らの一切を捨ててきた現地斗争一本権が、それ自体の自
運用として当然にも種々の行きづまりを生じさせ、「息づ
かぬはもう現地斗争も持たざる」ことかできなくなつたと
それは厳しく総括されるべきなのである。指導部がその危
機をなくすための、ペテン的に一転して「大衆の獲得」路
線をうち出して逃げをうつことを許す条件となつては、何
のために血を流したのであるか。

自らの命をかけて総括と教訓を出すことが断念しなければ
ならない。それが人間の最後の責任である。中核派の全同
志は自らの総括を出しつつ、NCC中央政治局に、「10・8
以降の全体的総括を出せ」と強く要求すべき段階にある
のだ。

II ベトナム戦争観の変遷 II

NCCの世界情勢の認識は、ベトナム戦争への評価の転換
と共に転換してきた。4年1月5・8月の頃にはNCCはベ
トナム戦争を「米中の代理戦争」(4年新年号「前進」
参照)という把握方をしていたことは有名である。トラ
ニスの中国承認(4年1月)や部分核停条約(63年8月
)が中核派からして世界をブロック化させてつづいて
いるという認識(イストナ、武井論文参照)に影響された
わけだが、実に香気な分析であったわけである。だが、
このベトナム戦争の代理戦争説は事実と反し不評でもあ
つて、4年8月2日の反成大集会(国民公館)での論争
を契機に、ベトナムのおこなつていふ民族解放戦争に対
して、アメリカ帝国主義が抑圧戦争(植民地侵略戦争)
の高地で情勢認識は深化するが、また局地的である。こ
の時高で情勢認識は深化するが、また局地的である。

だが5年2月7日に北爆が開始され、それまでの代理戦争
観や「米とベトナム」戦争観が現実によって強引に否定さ
れ、65年後半の日韓斗争(新植民地主義反対斗争)のどり
くみの中でどうしても考えざるを得なかった日米関係の
再把握の中で、65年9月にイストNo.16のオニ報告で有名な
「オニ三回大情勢認識」が打ち出されたのである。

二オニ三回大情勢認識とその問題点

このオニ三回大情勢認識(情勢分析)は国際情勢と部分
的な日米関係の分析にかぎらず、国内情勢の分析は実
にラフであるのだが、N.C.の情勢認識に決定的な転換をつく
り出したのであった。岩田宏の引用によつて世界経済危機説
をそのまま出した五全総(イストNo.11)や「革命的左翼
の一部では世界危機は世界革命ということが極めて容易に語
られていた」(イストNo.15 二頁)といった認識は大転換を
行ったのである。

このオニは、ベトナム戦争は世界資本主義の決定的危機の
集約的爆發点であり、アメリカ帝国主義は世界の盟主として
「イストNo.16 12頁」という詩的表現は言わんとす
る「イストNo.16 12頁」という詩的表現は言わんとす
る「イストNo.16 12頁」という詩的表現は言わんとす

ベトナム戦争は世界資本主義の決定的危機の集約的爆發点であり、アメリカ帝国主義は世界の盟主として「イストNo.16 12頁」という詩的表現は言わんとする

争説やベトナム戦争の認識の詩性に対して、一転して「ア
メ帝によつて絶対に止められない戦争」と断言することは極
めて極端な重臣的認識である。ニヤアニスとして適当なこと
と事実の全体像とは別である。

オニの向題は「前進」紙上で藤田氏によつてまとして
主張されたことであるが「ベトナム戦争はアメリカ資本
主義の危機を救うために行われているのであって、
アメリカ経済消滅のためにもベトナム戦争はどうしてもやめ
られなければならない。全く事実に戻す主張にまで
拡張されていることである。ベトナム戦争は、アメリカ
経済(国収支面)を危機に一旦送りやることはあって
もその逆ではない」

このような絶望感(太平洋戦争前にインテリゲンチヤ
が感じたような「永遠に続く暗黒」観)にともなつたベ
トナム戦争は「百年戦争観」は、一面的なヤルタ体制論であ
る。「戦後の帝国主義体制はもはやアメリカ帝国主義体
制以外に世界政策を全面的に展開できる帝国主義が存在
せず」(12頁)他の帝国主義は「アメ帝との結合」体
存関係、同盟関係においてしか自己の活路を見い出せな
い」(13頁)という戦後世界論「ヤルタ体制論は戦後世
界の基本軸を採らずに正しい。だがそれが固定化さ

情勢を決定する基軸になつてゐることは事実である。だが基
軸は基軸であつて、支軸もあればそのほかの領域もある。で
ある。それに「絶対終らない戦争」とは常識的にみて形骸な
ものであることを小ました上で、ベトナム戦争の深刻さを語る

此は、アメリカにガタがくると他の帝国主義国にもガタがくるといふものデモ、この理論の同定化になつてしまふのである。アメリカが世界政策を唯一展開しえたとの内容は何だつたのら。それは「核独占とドル独占」にあつた。この核のガタとドルの散布とという世界政策の内容であつた。だがこの双方の独占は、すでに消滅している。この「ドルと核」による世界政策の破壊、矛盾の転回こそが、いわゆる「中仏同盟」を生み、ベトナム戦争を激化させたのである。アメリカ帝国主義の完全専一的な世界支配の深刻な動搖によるロール・バック(ベトナム戦争)政策は、矛盾をなすドル金の問題が、アメリカ資本主義のドル危料を加速させるだけで、アメリカ帝国主義が「資本力のみが唯一最終の資本制社会」(マルクス)の必然性によつて動搖し再編成されて「完全専一的支配」から「基本的支配」へと地位を転落させていく過程なのである。ヤルタ体制の崩壊(それは世界革命によつてしかおこらないであろう)は、ヤルタ体制の基本的再編成(換骨奪胎的な面)にすぎない。ヤルタ体制の崩壊は、三行をたてて進行しているのである。一九四九年、五八年、六八年とみごとく国際通商危料が

「ドル危料」と世界危料

アメリカ経済の危料はイギリス、日本には急速度で波及する。経済と性格をもつては、E.E.C.は自立的でありうるという性格をすでに国際経済がもつていた。それは、この三、四年の国際経済の動向の中で示されるであろう。革命の客体的基礎である「世界資本主義における主要口の経済危料の同一性、内質性」は、いまだ形成されてはいない。だが世界資本主義の有機的結合の基礎をなすドル金の問題が、アメリカ資本主義のドル危料、イギリス資本主義のポンド危料となつて出現しているのである。従つて客体的な世界危料のはじまりといつてもよい。だが、アメリカのドル不足、ドル危料なのである。その裏側にはE.E.C.のドル過剰が存在していることを捨つては、物事の一面のみを強調することによつて「たゞ」は、ヤルタ体制の基本的再編成(換骨奪胎的な面)にすぎない。ヤルタ体制の崩壊は、三行をたてて進行しているのである。一九四九年、五八年、六八年とみごとく国際通商危料が

と、この通商危料の直後に資本主義世界経済が大回復に入つたのはどうしてか。ドル、ポンド危料が通商危料である。資本主義世界経済の皮相であり、かつ基礎(前提)でもある「際通商の危料」が、金融恐慌(部分恐慌)となり、各国の平価切下げと関税引上げ競争へとヒラスティックに発展するといふ見通しはありえない。いったん世界的にみてドルは不足なのか過剰なのか、いわゆるドル危料は世界経済をデフレの危料に追いこむのか、それともインフレーションの危料の発現形態もはっきりさせたりで、危料の危料とを呼んで「資本主義の死の苦悶」までマジメにされたのではマルクスは何のために「資本論」を書いたのであろう。

「現在」は「前革命情勢」か「性全体の相対的危料」ではない。それは世界経済の相成原理の重要な部面、一面ではあれ、一面部分をもつて全面、全体となすことはできない。全世界のみにて、追加投資がもはや利潤を生まないようになるまでに、すなわち

「性全体の相対的危料」ではない。それは世界経済の相成原理の重要な部面、一面ではあれ、一面部分をもつて全面、全体となすことはできない。全世界のみにて、追加投資がもはや利潤を生まないようになるまでに、すなわち

この革命の現実性」ならば承認できるが、目の前のすくなく、プロレタリア大衆が現存の体制の下でがんばるべきではない。本質が現実化する条件、契機、の到達を待ちに待たない。ほんにもならないどころか「革命近し」というペテンに、労働者大衆、いかなる同盟軍をかけるという有罪無罪の論議も、このままでいい。客体的な世界を「革命」として直撃するブランド（特にマルクス主義）の客観主義に強く反対し、こきたはれたものである。「革命の主体を危れはならない」という形である。

レーニンが我々はロシアであまりにも長い、くるしい血みどろの経験によって革命的気分だけでもついでに革命的戦術を打ち立てることはできないという真理を確信するようになった。戦術はその国家（とそれをとりまく諸国家）と世界的な規模から見ればこの国家（のすべこの階級勢力を冷静に厳密に、客観的に評価し、またその上に革命運動の経験を評価して、その評価にもとづいて打ち立てられなければならない）（左翼小見病）と、ロシア革命のにか

い教訓を語り、前革命的情勢として敵階級の動搖のほかに、プロレタリア大衆が現存の体制の下でがんばるべきでないこと、プロレタリア大衆が現存の体制の下でがんばるべきでないことを心からあげたのである。NCの優位性はこのプロレタリアートの成熟の度合を斗争戦術に生かすことにある。だからこそ、「我々に時代おくれになったものを、階級として時代おくれになったものとして考えなければならない」として諸社会主義に、しんとくも参加したのである。この思想がなにより一つであるのである。

千人未満の中核派の学生と、数千の反戦青年委員風に結集する青年労働者をもって、革命の主体的条件ができていこうと考えるのは、現代革命の困難性、現実性を尻にも安易に考える小見病的革命夢をひたしているとしたら、（本多書記長）という革命観はテロリズム以下のものである。

IX 日米関係・70年安保と日本革命

危険なことに、現在ムード的にはあるが、70年安保破滅を、革命とほとんど等置するような雰囲気がかもして出ている。その裏には、「70年安保の破滅は、全国家委員会がツブれるか」といった、イチかバチか式の70年安保決戦観が流れている。（厳密にはなく、調子として）としてより危険なことは、三里坂、王子の延長線上に70年斗争を規定し、それを固定化して、「全米軍基地に向けこの斗争」(「前進」)が、日本革命、ブルジョア主義への衝激戦術のイメージとして語られていることである。

70年安保斗争のイメージは、最近の「前進」の基調は「ベトナム参戦国化と核武装」となっている。本土の臨戦体制化、70年安保再改定、

この斗争(「前進」)が、日本革命、ブルジョア主義への衝激戦術のイメージとして語られていることである。少教者による基地斗争一本槍が、やがてこの斗争形態をエスカレートし、その延長線上に武装蜂起という相図をつくりあげること、簡単に予想が「く」。いま必要なことは、パテニ的見(き)の大衆化路線)で破産を期望することではなく、明確な自己切實的絶格を同盟的にやりとげることである。それができなければ、(そのことにはすでに保障が

身一の問題は、後者の、統基地化、臨戦体制化という規定である。これはニエアンスとしてなりともかく、戦後日本のアメリカ帝国主義との「依存—専制—侵略」関係のナメとしての「専制」の問題として厳密にとらえ直すなら、かの悪名高いブランドの「プロレタリア弾圧」破防法、騒乱罪)と、労働者大衆(多数)へのイデオロギー攻撃、懐柔という二者をたくみに結合しよう

と意図しているのがブルジョア的である。このブルジョア攻撃を一面化して、簡単に臨戦体制(準戦体制)がひかれると主張することは、戦后プロレタリアートの戦斗性の否定の上にはかたがたないことである。

ヘヤニの問題は、前者の「ヘトナム参戦国」と核武装化「安保再改定」という等式が自明の理として語られ、「絶対さうなのだ」とステロタイプ化されはじめているが、その根拠は一体どこにあるのか、ということである。ヘトナム戦争が永遠に続くと考えるのは、フルールの絶望感の上になり立っており、主観的意図はさうでなくとも、資本と帝国主義を万能視する資本主義美化論に陥っていることを、結果的には証明している。

ヘトナム参戦国化と核武装化のために日本帝国主義者にとって一ばんのガンは憲法であって現安保条約ではない。現に現安保条約の下で、憲法との衝突をぬけて最大限のベトナム参戦国化は強引に進められている。アジアの日本共国防衛を規定している現安保条約のこの条項が参戦国化(

ろうが、そうだった分析がNC中央政治局によって一度でも示されたことがあるだろうか。ふしぎなことである。しかしその学生活動家が「七一年は知らんよ」と言い出さうという危情で不誠実なやり方は、一九六五年頃にさかんに主張された「日本資本主義の打倒的不況長期停滞・低成長論を、現実が打ち破って神武景気以上の高度成長が六六・六七年と続いていってもなんの検討もしないのと同じやり口である。

世界資本主義、なかんずく米・英・日帝国主義国に複雑な様相で醸造されてきている危れへの反響として、そして現安保条約体制の強化に対するプロレタリアートの側からの反響として、主體的に創り出す斗いとして、すなわち安保条約被棄闘争として七〇年闘争を準備すべきであって、すべてを七〇年にかけるのはまちがっている。(我々が安保闘争被棄闘争というばあり、それは条約が再改定されるか自動延長されるかを問わない。)

学生活動家が、六〇年安保以降の、しんどい、絶望的になりがちな状況に耐えぬき、「七〇年には一ぱつやってや

ブルジョア的の言葉でいえば共同責任、共同防衛」と衝突するであろうか。また核武装にどうも現安保条約が法的にどう邪友でどう改定せぬば核武装がひかれるのか。六〇年安保改定の際には、すでに五八年には安保改定のための日米両国の準備打撃がおこなわれていたのがある。

社会党やフントのように、現条約の自動延長をすでに決ったものとして絶対化することもまちがっているが、なんの厳密な検討もなく「六〇年のつぎは七〇年」式のセンスで七〇年に安保条約が再改定されることを当然のこととして絶対視するのも間違っている。既成事実の積み重ねで現安保体制が危ピツチに強化され、日帝の軍事力強化(核南発計画を含む)かそのスピードをあげていることはまぎれもない事実であるが、それら

が、現安保条約が法的に決定的な措置となり、それを再改定せぬば現実政策をこれ以上飛躍的に展開できないというほどに現実的矛盾が累積していると言いつくされるは

「と賭ける」心情と心意気は派が出るほどよくわかる。だが、「七一年にすべてをかける」(ガタガタになった他党派をまた吸収する)という革マル派は、革命家として最後である。

二七〇年安保闘争は軍事基地闘争か、すでに現情勢を「前一九〇五年」と位置づけ(「前進」ト三八一号)七〇年を第一次日本革命と想定するようなことが平然となされはじめられている。我々の結論は60年世界資本主義がゆるゆると高度成長・繁栄を詠歌して来た時代であったのにくらべて70年が相当深刻な事態にあたるであろうと考えるが故に、「70年闘争が日本革命の原基形態を発現するだろう。否、そうせねばならない」と

いう立場であって絶対に70年革命とは考えない。この

結論の根柢はただひとえにプロレタリアートの内部における革命的準備が未成熟であるという主観的条件にある。

我々が70年斗争を日本革命の原基とするというとき、その「原基」とは「70年セネスト」の実現をめざして追求して行くという立場である。ロシア資本主義国でも、ストライキ斗争の激しい高揚なくして前革命的情勢は訪れなかつた。我々はいかに絶望的に見えても「セネスト」の中に革命の「ロイヤル」を見出す「立場」を我々の立場として堅持しぬく決意である。「そんなことで面であつたのか」という

喝喝がすでに聞かれた。しかしさうでなければ、ロイヤル・ルンペンブルクのスバルタクス・バンド(主業者・ルンペン主体)の運動が他ならぬ喝喝者達に待っているだけだといふことを言えよ。国際共産主義運動史を斥けるは勉強した我々は、長い長い絶望ともみえる革命の準備期に倦み耐えきれなくなつて、一揆的に暴動主義的に70年下かけるわけにはいかないのである。

「俺がアメリカにいたる黒人に銃(武器)を渡す」(本

多書記長)というセネストでもって、70年安保斗争を、二百数十あるといわれる日本の米軍基地に対する斗争として至少化しようとする路線には、我々は無縁である。明治維新(ブルジョア革命)のときの高杉晋作はりの奇襲作戦は、プロレタリア革命では通用しない。物理的斗争のエスカレート、固定化、持続化が闘う相手を「物」としてみえる集団化をさへなうことは、すでにのべた通りである。

「日米同盟は単なる軍事同盟が三里塚、王子斗争の絶対化のみならず、日米帝国主義が次に基地に具体化されたのである。权力の具体化、唯物論は、打撃目標を明確にする上で一定の意義をもっている。日帝に対する斗争対象が、国会や首相官邸と多数されるようである。だが、佐世保斗争以前のアメリカ帝国主義に対する、具体的抗議物が、アメリカ大使館(領事館)であつたことを想起せねばならない。現安保条約は、たしかに法律(条約)としては「軍事

争的である。だが、我々が打合せをせねばならない反動的日米同盟(関係)は、条約ではなく、単に軍事面だけではない。経済・イデオロギイ・政治・軍事の全社会関係を意味している。帝國主義同盟がまずやりに当該国の革命運動の抑圧にあり、(反革命同盟)が次に帝国内の利益の独占的擴張にあり、(強盜同盟)が次に現在では中野に於けるためにある(いわゆる反共軍国同盟)という本質をもつて、不可分の一組成部分として革命運動上に位置付けられるのである。日米同盟は、経済同盟であり、思想同盟であり、なかんずく政治同盟であるところをいふはならない。従つて米軍基地、それと密接不可分の関係にある自衛隊基地への斗争を特殊な斗争戦略として看做しても、すべてを全面的政治斗争(労働者の集団、デモ、スト)という斗争形態のこととして全面的政治斗争として展開して行くことを原則として展開して行くべきである。この「原基」としては活動家々々々の覚悟だけではない、……現

地斗争ならいふにせよ、これと覚悟すればやはり行けるのである(全国的政治斗争、学生、全国の全労連セネストの覚悟が先行するであろう)。これをいふは、自らの所属する労組、自治会からの代表派遣としての上京斗争(基地)斗争が、70年にはかちとれるよう現場の中、労働者の内から準備して行くことである。70年を革命的に準備することなのである。また、「現地斗争」現場への還流「かちとる」は、このことである。現地の斗争は、このことを考えるならば、「現地斗争」として労働者の大衆的政治斗争をくり出せるのだ。この「覚悟」をいふは、厳しく実際に備へて再検討せねばならないのである。

NC MWの金労働者は、六四年の原簿斗争らしい、「70年斗争のためには、まずもって六〇年安保斗争安保が」
「街闘での斗争を戰場に繰り出す」大武を全力をあげて
努力して来たのであった。D支部としては、今後ともこ
の路線は教団に追求するが、一度嚴重にこの路線の意義
と限界を検討せねばならぬと進言している。
この上には、職場斗争と街頭政治斗争とは、単に「内
と外」という平面上にあるとして扱えるのではなく、「
下と上」という關係で、職場斗争の原理と街頭政治斗争
の原理がどこまで同質的であり、どこが異なるのかを
扱えなければ、その中にも街頭行動を職場に繰り出す
「」」のの意味をつかみなおさねばならぬと思つてい
からである。さなければ、街頭左翼の限界を思想的に突
破できないからである。吉本隆明も、思想をローパーの
次元で乗りこえることとは簡単であつても、実際の運動の
なかで実際に突破することは、思つほど容易でないこと
を、10・8以降の中核派の実践は教をくわけているので
ある。

70年斗争のためには、まずもって六〇年安保斗争安保が
したの教訓をあまりかたにすることからはじめねばならぬ
い。中核派の学生そのものの中には、直接的体験者は皆
無（年令からいって）であることもあつたからである。
一面的な情勢の維持一色化、七〇年安保斗争のイメージ
の歪小化を通じて、遂に全国委員会、マル青労同の屋
核心ともいふべき前衛党論の発展にまでおよんでいくの
である。次に検討する現NC指下部多数派の党観について
この批判は後述する。

× 前衛党論の変質 — スターニクス流への傾斜 —

10・8以後の今回の路線対立は、劇画に於ては、六七
年十二月二十九日の本多書記長の「NC関西地方委員会の
全幹を不信任する。木下政治局長を関西に留置させ、そ
のうえで劇画を再建する」という一方的宣言にまつては
じまつたため、論争と思考の中心は当然にも党論へ向つ
ていった。このまつに出発点が、中央政治高という上か
らの予告なしの通告であつたことは、華の本質を鮮明に
した。「一切の反対意見、反対派をついに本質がある」と
と決野同志が言うのは当然のことである。それまでの劇
画に二かた問題があり、その二つともこのやりかたは別の
問題である。上部機関が下部機関に対して商會無用によ
信任を失つた、人権を二カ的にとりあげてしまつた、こ
うスローカンの中核は、これにせよは講じられるやうな
とが社共商會に代つて代つたとする岸村若虎創成の母体
相識にあつて二二二二二二二二二二二二二二二二二二
その後も、「同盟のホルシエビキ化」として大儀石分が
主義以外の何物でもな二二二二二二二二二二二二二二二二二二

「レーニン」党組織論をどうのこしたか

「そもそも」NCの党組織論は、「同盟のホルシエビキ化」として「スローガン」をそのまま認めることを否定するものとして形成されたのであった。その思想と、現在NCが充分な機動性を持ち得ないこととの間に矛盾があるとしても、この矛盾は後者が前者に再帰すれば解消可能である。NCの存在意義そのものが変質してしまつたのである。

NCは「レーニン・ホルシエビキ」論を、スロータリヤ革命という大原則から批判的検討を加えてきた。その一つは、「労働者階級解放の闘争は、労働者階級自身の作業である」という原則と「レーニンのソバイエト」(コミンコン)を軽視して「同盟」が、我々は「コミンコン」を本質として、その創設に最大の価値をおき、前進黨を「手段」と位置つけたことである。そこでは「党の自己止揚」が最大の価値となる。オニには、その現実形態として「レーニンの党論」としてホルシエビキの

「職業革命家集団」の党論を鋭く批判し、またスロータリヤ階級内部の前進黨組織(現在ではNC労働者細胞)を中核とし、それに外部指導部としての職業家集団との合体をもつて前進黨の構成原理としたことである。

「職業革命家集団」の党論を鋭く批判し、またスロータリヤ階級内部の前進黨組織(現在ではNC労働者細胞)を中核とし、それに外部指導部としての職業家集団との合体をもつて前進黨の構成原理としたことである。『厳格な職業革命家の集団を中核とした中央集権的党組織の意義が、いさう重要なものとなって、われわれの前につかひあがってくる。』(前誌、三七九号、日井論文)は「レーニン」党組織論そのものへの逆もどした。我々は「レーニン」の党論の根柢を否定したのではなかったか。「何と云つても党は再建だ。インテリの向背だ。労働者はあとについてくるものだ。」(本多書記長)という通河次「レーニン・ホルシエビキ」論にあってからこそ「なにをなすべきか」をめぐり批判的に検討したのである。オニには「なにをなすべきか」に答へようとするのであつた。オニには「なにをなすべきか」に答へようとするのであつた。オニには「なにをなすべきか」に答へようとするのであつた。

「レーニン」の党論、思想的・理論的源泉の上で、NCは存在しえない。他の革命同盟に對する優位性を持ち、革命的マルクス主義をかかへられたのである。この成果と共通

「レーニン」の党論、思想的・理論的源泉の上で、NCは存在しえない。他の革命同盟に對する優位性を持ち、革命的マルクス主義をかかへられたのである。この成果と共通

産別委員会と地区党

「D支部」としては、地区党をめぐる問題が、中央及び

中央に直従する南西の取巻との最初の対立点であつた。

中央下のからのNC南西地方を不信の理由(1)

10.8以来の京大での社運同との斗争に於ける敗北とそれへの無反省

③六七九年九月のNC四回大会で美濃都支部、美濃都都政推

討に南西が強く反対したこと

④公務員賃上げにおける教員

と大阪支部の経済主義・組合主義(の)の)が結合され

て、「なにがなんでもNC地区反攻をつくる。そのために

は、現在の南西マル青労働者の産別組織形態はかた。地区

党にする。」「と一口線がふきあれたのである。しかも「

切の絶括を抜きに。」「また労働者同盟の根柢に抵抗によつて何ら実現されてないが、「産別セクト打倒」への南

「再度確認しよう。NCは、党の問題で、革命の本質で

ある。スロータリヤの自己解放の視座から再構築し、

「コミンコン」の創設を核として、「スロータリヤ的人間

の論理・革命的労働者の組織化の論理」として打ち出し

たのである。レーニン死後の労働者運動(労働者の即

自的団結の形式)の変化との関係がいかに弱かつたとい

え、「ソウヴェート」主体・党「手段」として労働者党の本

質をめぐり「提起」されたのだ。そして規律の問題、党員

の資格の問題を、外部強制にはなく党員の主体性(内

容性の発露)として展開して行く過程を、「スロータリヤ

」の共産主義者への変革」と位置づけたのであつた。

「党の軍団」説によつて現在まかりとあつてはる決意

新樹同志を目標に強引に押し通されようとした地区党は、何をイミしたのであろうか。

ホルニエビキ党には、たしかに産別委員会という組織形態はない。しかし、NCCの産別委員会は戦后日本の労働運動の内部特異から、労作者の地域的団結よりも、官公庁とくく国営口みられるよう、全国的な有料的統一性が、産別の団結にあることを小まえたうえ、企業別組合を中から突破していく組織形態として「労作者の知恵」が、独自の仕掛けをあげたものである。まさしく「産別委員会」が同盟の創造的な組織戦術の根柢に横たわる主体的根柢「(イストNo8-14)」なのである。このやうな正史的な主体的根柢について向きを添えることなく、NCCがホルニエビキ党の組織形態の根本的変更をなしていることもつ意味を再考することなく、「産別セクト打倒、労作者主義打倒」とぶったぎることには反対する。また労作者階級とその内在的論理について意識的階級に形成し、労作者階級が、資本家階級を打倒し、

ロ「タ」リア民主主義を樹立するための手段として、必要なら前在党の形成という基本問題を、「地区反戦の態から党をとりえる」即ち、地区反戦のための地区党という形で提起され強行されようとしたのである。

これは「当面する有様形態からの労働組合の形態を改変する」引きまわしであり、従って地区党は、「一切の基礎は工場細胞であり、教養業・十教養細胞の基礎の上に」つくられるべきであり、(イストNo8-14)「なつかつ地区党は、現実の政治系諸団を主体に」つくられるべきである。(イストNo9-15)「この確立された地区党建設の諸原則を全くかえりみず、大阪市という政治系諸団を、ほぼ別個となる有下と意識的にひとつたりはした」りするの判断案なるものを強行しようとしたのである。このやうになると「教養業・十教養細胞があるか、NCCの労作者同盟がたった一人しかいないのに地区党をポッチあげよう」と考えるのだ。D支部からの批判に対し、木下中史Pは、「今オルタ中だ」と答えてはじない。地区党

口線であるから、この「地区反戦のための地区党」という意識形態であるから、この意識形態は反対なのである。

党内民主主義の瓦解

以上のやうな反対意見をD支部から提出するところから、作ることと認めよ、黄泉はそれかと言え、「我々が地区党を組織したからDも真剣に考えたのではないか」としか答えず、D支部の意向「今までの関西の活動・産別組織の活動に対し、どういう態度をした上で出しているのか」に対しては、三月二日労作者NCC総会以来今日に答えるない。このNCC労作者総会にても、木下中史Pの指名による地区委員が勝手につくられ、その地区委員をすすめるべく、「エ」からつくる「官僚主義」のせいでせまっていたのである。我々は、たとえ正しく地区別であっても、我々の主体的力量をもって若下三分割の地区別編成が可能だとは思わない。ましてヤマン

りわけられてしまふ。そんなことがあってよいのだろうか。NCCの決定で自衛的に同盟を築く必要ある地区党に、この前「ヤマン」した態度を強要してこるのだから、いさむのである。だからこそ、D支部としては、組織を大会以来関西担当中史Pがやった木下中史Pはよく知って、いさむのである。だからこそ、D支部としては、組織を

地区党のなかでMIDがどの位置に役割を持つのかもわか
らないうまま、「NCC決定だ」でもって、すなわちたず
けられる以上の直権があるかどうか。現在の党建設の段
階でMIDの同盟員がそのなかのNCC同盟員の3〜4倍の
ことには達しないことと思う。その三分の二か四分の一
のNCC同盟員によってMIDは自由自在に動かしてよいわ
けはない。MIDで討議し、NCCの方針がおかしければ
は、NCCはその方針を拒否して、MIDは変更しなければなら
ない。これはすでに木下及び小西同志は「許せない」とい
っているのだ。

XI 戦後主体性論の摂取はどこへ行ったか

一 非合理的根性主義からの訣別

NCCのつとめてた革命的共産主義運動の三つの源泉は、
①戦後主体性論の批判的摂取 ②戦後日本のプロレタリア
ートの特殊な成り立ち ③ハンカリア革命であった。戦

今度の同盟のすべてに於て、NCC現指責部の多数派は、
同盟員（人間）と組織をまるで「将棋の駒」のよう（思っ
ておつ）としておるのである。絶対に許すことのできない反
革命的な思想ではないか。「将棋の駒」になることを拒否す
れば、必ず言葉は「併行者主義だ」なのだから、何ぞか言
わんやんである。党の民主主義は無視され、中央集権はか
りが強要される現状、NCC内西指責部多数派の党綱は、ス
ターリン主義そのものであり、党内における良主々義否定
は、党内に於てはセクト主義としてあらわれつつある。

権を核とした戦後主体性論等は、NCCの基本の基本を
支えるものとしてある。知識人の戦争能力への自己批判
とこの倫理を契機に入、日本伝来の哲学「おのれをおのれ
のなかにおいてやる」（西田哲学）とこの構造を「おの
れをおのれか他ともつ関係において把える」逆転させた
主体性論は、NCCにおいて「ほかならぬ、おのれをおの
れ」として縮小した。ナラ「主体性としておのれならば、
このことはヤリ、戦前の革命運動に於て、やる気があ
るのかないのか」という根性主義へ非合理的根性論の世界
へとどめるいにかげんさともうやをもつが、革命家を
支えてきたところへの訣別を意味し、オニには「対象変
革なくして自己変革なし」というスターリン主義の如き
なる素朴な根性主義を「自己変革なくして対象変革なし」と
いう側面から乗りこえたことを意味している。

二 再び根性主義の発生 10.8以後

しかし10.8以後のNCC内指責部は、「やるやんやえ

あれば、何をやってもよい。すべてが許される」という日本
的ヤクザの世界に入り込み、またもや根性主義と素朴な根
性主義と転落し、NCCを裏切った。10.8日西田哲学の
占拠と戦後降参のメメントをくりかえしている。木下中核の
は「NCCのなかにはやるやんやえだ」といふ必要がやんやえ
にあった。このこと自体を懸念して、このことではな。何
ぞこのやるやんやえを扱った、この言世の一人をききと、こ
の強調は何を言いたかためなのであろうか。

NCCは、戦後主体性論を批判的に摂取した実践的唯物論
を基軸とし、反帝・反スターリン主義の闘いを政治の次元
へとどげる。運動の「担い手」の問題として人間変革を促
すし、それを革命の本質としての「併行者階級の自己解放
しを明確に位置づける」ことが出来た。更にいかなる運動過
程に於ても、併行者内部に「中核を形成」可能なことを通し
この併行者の自己解放を貫徹しようとしてきた。この意味に
こそ、他のすべての反スタ諸組織との区別性、優位性があ
ったのだ。「中核の形成」という組織論的論、そして極端

な表現をすれば、労働者主義に優位性があったのだ。

しかし命令や、「革命をやるのはやはりインテリゲンチヤだ。前征隊は取巻の果まきで労働者はあとからついてくるもの。やがてある取巻を名づくれば、千人の労働者がたてえの人間になってもやむをえぬ。労働者自身もまた組織しなすべし(武井書評長)と云う。おそろひき労働者ズン視、労働者の手段化が進んでくる。組織戦術論という我々の核は「マルジョアジーの政変から直接的に任務をひき出すのではなく、プロレタリアートの反発、成熟度に応じて任務をたてる。」をあげて、情勢→任務」といって魯観士を入居してしまっただ。

「革命の現実性」と革命の主体

その二には「革命の現実性」「死の誓い」にある。山口玄メ「この」帝ロ主メ段階全体に対する現実性、直接無條件的に現実としてほめ絶叫的ヒステリックに革命と云う言葉を執拗させる操作の、前進が証明済みである。

る。その二には革命主体たるプロレタリアートの反発・成熟の度合など入り込ませる地もある。

帝ロ主メ段階を世界史的に把握する「革命の現実性」は、その基盤に「戦争の必然性」論をもつことは看過し、またマルサイコ体制(オニ次大戦)とマルタ体制(オニ次大戦後)の間に目を回らせることを阻み、無内容な情に訴える方法は、危険である。「何を誰が、いかにして」という認識と実践の「批判」思想はどのへ行ったのか。

人間変革論と「労働者階級自身解放」といって哲学を失ったNCには、おまや「マニエ以下のマンデ主義」の直しか残されてはいない。「なせばなる、なせばなる」なにも、なせばなる人のなればなりなり」といってマンデ主義を馬成部と、清水大夫の引用は、この二つNCに復活した。

「思想」と哲学は変質した

心あるNCの指し部は、現地主義のヒステリーションが、座りかすかりのみであった。また「思想」も「哲学」も、

なつていふ目的「無自覚的」だからこそ体系的に脱離し、西メはつづけてもしかたがない。千人の労働者がいかに受領せよ、放棄してしまふ、この現実を深く悲しむべき、なつても……」(本多発言)とこの中で、プロレタリア

NCの政治運動のなかのこの書評であった。「自己決定の政治」「政治制度の政治」といって政治制度は、マキヤリスムに政治カは主メロソウのかわり、カニ、奴、敵だ。殺せ、」とこのメに、革命の原理「権威の西」に「脱着」している。本多書評者は、10.8以降のメ、南西の停滞「悠り」「佐世保では南西の学生二百人は利用させてもらう」と書評する。どこがちがうのか、「南

ドローニズムのひごかけつてもオニにされるのは、現地主義一本槍口線と根柢、投石主メが、ニにあって我々の思想と哲学すらも受領せよと云うことが明らかになった。

いたがらに、なげさ、かつてのNCは、この未練は同輩の解決をひくうせよだけである。わの結論に入る。

XII 結語

同盟内討討が始まってから、四ヶ月以上もたっている。している。へとて十日は、二十二回までは無難だが、我々の支部がマル青大会を要求し始めてからでさえ一ヶ月以上がすぎた。(三月末から小西書記長と討論のたび

に口頭要求をして、四月十日阪青委員会の上及び四月二十五日南西地の委員会の上で正式に要求し両会とも正式に中心にした推進体制からであったため、更に、南西の地を

めから不信の上で成立し、また相互信頼の確立のため非
常に時間がかかるし、又、今流れてくるうちに中にお
ける「〇〇は故意に書架をまけて支部に報告して」「
などというはじめからの〇〇をZOOMで報告するもの
として位置づける自信が、何のたがひもなかりてくるかを

考えるとき、信頼の回復など不可能ではなにか。しかも
この事態が、我々の支部の「総理事」に対し「じかじか」
「おつす」では良化する。しかも「機械的」の諸材料

Mのそれしを置いて討論を導いた上で「と答えてつ
けてきた人達からどういふ解意をする」まで心をなされ
た事は「支部」としては「た」にもえて「弾新する」「大会の
きたりなど被験者づらするな」とこの向きの「この書態
を冷静にひいてた」。あらゆる「重要書架」の「有数の

中、この「書架」で「あつす」我が「唯一」の「目」を「相念」た「ZOOM」
だ。其「相念」たとして「同来」我々の「支部」の「金庫」に「こつても」
かけかえの「ない」、だから「こそ」「あつす」として「誤り」、まして
や、其「基本的」な「諸案」に対する「誤り」、其「回答」の「位置」は「許せたり」
の「べき」だ。

「党内」斗争「ある」のは「全宗」斗争を「止断」せざる「う」に「この」過程
で「地方」書架の「メンバー」にも「呼び」かけてきた。しかし「これ」も
「契り」な「かつた」。

「I」支部として「は」、(「三」に「至り」、重「大」な「決意」でもって「器
名」に「なる」大「会」を「求」た「け」が「あった」のである。ZOOM「演説」支部の
「下」キ「ル」新「理」キ「メ」の「転」落「は」、あ「く」時「でも」阻「止」する「ため」に
「この」決意を「宣言」する「よ」

マルクス主義青年所竹書問題、教育内竹書書架
大阪支部

11 大阪支部の「竹書」問題の「契り」な「かつた」
大阪支部の「竹書」問題の「契り」な「かつた」